

ふわり、闇の底から浮かび上がったかのようなだった。灯る明かりに現実感はいまいち戻ると、百々はシアターBの座席で大きく息を吐き出してゆく。吸い込むや否や隣り合う席へ満面の笑みを向けていた。

「すごかったねー。あたし興奮しちゃった。やっぱり大自然は偉大だよっ！ ね、ねっ！」
なら腰かける田所が向けたのは、どうにか噛み殺したあくびの残る顔つきだ。

「おま、こんな時間なのに、ほんと元気な」

「だって、すごかったじゃん」

時刻はまさに深夜零時。鑑賞はつまり営業終了後に行われる次回作の試写にほかならず、例の件の罪滅ぼしか、水谷に誘われ初めて参加した百々は公開前の新作鑑賞にすっかり興奮しきっていた。

「ペンギンって泳ぐと早いんだね。それからキリンっ！ あんなに可愛い顔してるのにさ、ものすごい迫力でケンカするんだからびっくりしちゃった。こう首と首をぶつけてバチンバチンって……」

真似て左右の腕を交差させる。陸海空と長期ロケで撮りためた大迫力の映像を再現すると、えいやの勢いで叩き合わせた。

「……ってさあ、お前、ちゃんと見てたの？」

だとして田所の反応こそ薄い。噛み殺したあくびのせいで滲んだ涙を拭いながら百々へアゴを突き出してみせる。

「仕事で見てんだろ。フィルムの傷と音声のチェック。できてんのかよってコト」

走り書きながらも不備内容と、その箇所に相当する時間が書き込まれメモを百々の前へ持ち上げた。だが急ぎ拾い上げた百々のそれはといえば、まったくもって白い。盗み見た田所の肩もガックリ落ちていた。

「あんな」

「ま、最初だから仕方ないでしょ。今度からちゃんと頼みますよ、百々君」
声と共にポンポン、背もたれを叩いたのは水谷だ。

「じゃ田所君、映写室、来てね」

「あ、はいっ」

己がしくじりに打ち震える百々の相手もそこそこにシアターを後にして行く。待たせるわけには行かない田所の動きはそこで慌ただしさを増していた。

「着替えたらロビーで待ってろよ。俺、駅まで送るから」

立ち上がると百々へアヒルと口を尖らせる。

「え、そんなのいいよ」

うなだれていた百々の頭も跳ね上がる。

「お前さ、良い悪いじゃないって。この辺、ビジネス街だから今の時間は人通らないし、さっきニュースで台風の進路が変わってコッチ来るって言ってたろ」

言う田所はもう水谷を追いかけてその肩を、重たげな防音扉へ押し当てている。言い放つと、開いてするり向こう側へと抜け出していった。

「わあ、ちよっとタドコロ。大丈夫だよ。一人で帰れるよ」

追いかけて百々も抜け出したフロアは照明が落とされると、灯る非常灯を青く床へ滲ませている。むしろ表通りの方が明るく、正面扉の窓から確かと荒れる様子をくつきりのぞかせていた。

「それよりタドコロ待ってたら終電に乗り遅れそう」

「遅れたら遅れたらでバイクの後ろに積んでやるし」

ラストまで詰めることが多い田所は普段からバイク通勤だ。

「でも駅までちよっとだし……、やっぱいい」

そんな田所と並んでロビーをカウンターへと回り込んでゆく。百々は大袈裟だと首を振り返した。

「そうか？」

引き下がる田所は渋々といった具合だ。

更衣室はシアターAのロビー脇、そこにある鉄扉からバックヤードへ入るのが手っ取り早く、映写室はカウンターの背後、事務所を入ったさらに奥にあった。ゆえに互いはカウンターを前に行く先を分ける。

「うん、ありがと」

「田所くん」

待ち切れず水谷も、事務所の鉄扉から顔をのぞかせていた。

「じゃあ気を付けて帰れよ」

「もち、おつ」

投げて百々は水谷へも頭をさげる。お疲れ様、と手を振り返す水谷はついでに何事か思い出した様子だ。百々へ、そうそう、と切り出していた。

「そろそろ例のハナシ、ね」

その意味ありげな伏せ字が示すところは差し当たってのアレだろう。知れるだけに思わず百々は伸び上がっていた。

「そろそろ何も、お話できることはありませんからっ!」

そう、いつものアルバイトにいつもの仲間がいたとして、百々が変わらぬ日々を送って

いるのかといえ、それは少し違っていたのである。

世間で言うところの「ポン菓子製造機暴発事件」が原因を含めて世間から忘れ去られるまでおよそ十日。田所がその話を百々へ持ちかけなくなったのは、それから三日ほど後のことで、今日はといえばそこからおよそ二週間経った、事件からひと月後にあたった。

事件直後はセクションCT入職に必要なID作成のため生体データはもとより、各種誓約書に契約書へのサイン等々、百々はこまごました手続きをこなしている。しかし終われば呼びだされるようなことはなく、提出した書類と引き換えに一枚のカードと無骨な専用端末を渡され「待機」の日々を送っていた。

さてこのカード、説明によれば身分証明書で、端末に至っては全職員が所持するGPS内蔵の、多量なデータも高速通信が可能なスグレモノらしい。基本操作は当然のことながら、身の危険を感じたときオフィスへ送るアラートの操作方法を教わり言い渡された常時携帯の言葉通り、いつも持ち歩くミニトグリーンのトートバッグへ放り込んでいた。

着替えをすませた百々の目に、今日もそんな端末はチラリと映る。だがうんともすんとも言わないなら無視するにつきた。

置き傘を手に、出た通用口で吹きつける風へ身を縮める。

「電車、動いてるかな？」

最寄り駅は「ハモ公園」の方角、「20世紀CINEMA」前を真っ直ぐ進んで二つ信号を渡り「ハモ公園」とは逆方向へ折れたところにあった。周辺は繁華街に囲まれると深夜でも明るく、一角のコンビニエンスストアでご褒美スイーツなんぞを買って帰ることも希ではない。

とはいえもう時間が時間だ。甘いものは止した方がいいとして飲み物くらい買っておいた方がいいかと考えつつ、百々は一つ目の信号を渡る。誰とすれ違うこともないまま、さほど離れていない二つ目を目指した。

と、それは背後からだ。近づいてくる靴音はふいと現れていた。おや、と百々が聞き耳を立てたのは距離を詰めてくるだけでなく、進めば互いにぶつかる位置を取り続けていたからでほからならない。

なんだか落ち着かない。近づくほど増す気味の悪さに百々は歩みを早めていた。合わせて相手も歩調を早めたなら、嘘だと思うままさらにピッチを上げてみる。追いかけてそれ以上、相手もピッチを上げたところで、悲鳴は脳裏を駆け抜けていた。

きつと痴漢だ、いや強盗か。もしやのテロリストならこの世の終わりで間違いない。次の瞬間にも前傾姿勢だ。百々は喘ぐように駆け出していた。挙動に背で靴音もけたたまし

さを増したなら、そこからの加速こそ、それ恐ろしい慣れにまみれて追い上げてくる。

「おい」

二つ目の信号を前にして、肩はついに掴まれていた。

感触に飛び出しそうになるのは内臓どころの騒ぎでない。魂すら決死の覚悟で押しとどめる。とどめて抜き出すのはあの端末以外ほかになく、ついで百々はトートバックもまた振りかざした。

「痴漢っ！ 強盗っ！ テロリストっ！」

触れる手を払って身を返す。死に物狂いだ。叩きつけた。

「違うッ」

「違うわけないっ！」

放ち、命を懸けてアラートボタンを押し込む。

「だから落ち着けッ」

と知った音は、ピピピと間近から聞こえていた。それが端末の呼び出し音だったとして、百々の手元からではないのだから妙な話だろう。

「俺だ。……そうだ。間違いだ。今、ドドという」

聞こえて百々はいっしか固く閉じていたまぶたを開いていった。なるほどそこには食らっ

た不名誉の応酬によるものか、それとも事態の深刻さを表してか、むっとした表情でセクシオンCT職員、レフ・アーベンは立っている。

「あ、あれ？」

コレ、ソレ、ドレ。

「は、は。なんだ、びっくりしたあ」

フォローの仕方が分からず思わずコイツが悪い、とあるのかどうか分からないトートバックの首根っこなんぞを締め上げてみる。だが端末を胸元へ差しなおすレフは目もくれない。羽織るジャケットの襟を整え、ただこう告げる。

「緊急の用件だ。迎えにきた。今から現場へ向かう」

とたん百々の笑いは止まっていた。

「現場って、テロの？」

「そうだ。この近くに爆破予告がつきつけられた」

「あのお兄さん……」

顔は浮かんで、百々は頭を振ってかき消す。

「違う。出たな怪盗ソーワットっ！」

「いや、相手は何も盗んでいない」

握る拳を震わせたところで正されていた。

「何でもかんでも爆破しちゃえばいいってもんじゃないわよ。愉快犯めっ！」

「愉快犯でもない。奴らはテロリストだ。分かっているのか？」

いつまでたとうとキマらない無限ループやいかに。

「知ってますっ！とにかく、なんだって人の平穏乱す輩はみんな同じなんですっ！」

「分かった。ともかく現場はこの近くだ。丁度いいタイミングだと迎えに来た」

「だったら端末、鳴らしてください。滅茶苦茶、怖かったんだから」

懇願すれば傍らへ、ワインレッドのワゴンは滑り込んできていた。向かってレフが手を挙げたその先に、瓶底眼鏡の彼、外田ことストラヴィンスキーの顔はのぞく。

「細かい話は中だ。乗れ」

「了解っ！」

つまりハナから終電など乗れるはずもなかったらしい。助手席へ身を沈み込ませたレフに続き百々も後部座席のドアを開いていた。

「って、それってあたしのシフトがそっちへ流されてる、ってコトですか？」

としか考えられないいきさつに後部座席で眉を寄せる。

「でなければサボタージュなのか拉致されたのか、万が一のとき把握できない」

シートベルを引き抜くレフはしれっとしたものだ。

「ええっ、あたしは何も聞かされてないんですけど」

「はいはい、出発しますよ」

むくれたところで、たしなめるストラヴィンスキーがアクセルを踏み込む。街並みは百々の両側で飛ぶように流れ、見上げた空には夜だというのはっきり見て取れる黒さで雲が流れていった。また風が強くなったらしい。狂ったように枝を振る街路樹も次々飛び去ってゆく。

「指紋が一致した」

と、助手席からレフが振り返った。

「指紋？」

問い返せば小さくうなずき返す。

「テロリストと接触後、俺たちは『20世紀CINEMA』を出たがあの後、鑑識が駆けつけている。そこで採取されたものだ」

「あ、ショーケースの……」

「彼、列の最後に並んでたらしいですね。だから指紋がついたのも一番最後。ということ結構いい状態で採取できたそうですよ」

眩く百々へ、ストラヴィンスキーもルームミラー越しに視線を投げた。

「各局のデータと照合。該当するものがないと思われたその矢先、符号する指紋と共に犯行予告は送りつけられた。直後、指紋は入国管理課のデータと一致」

展開に百々は身を跳ね上げる。

「あのお兄さん、何者だったんですか？」

うちにもワゴンは国道へ抜け出すと、天候のせいなのか時間のせいなのか、ガラんとした路面をまたもや青一色で連なる信号に導かれ高速入り口へと走った。

「不法就労者だ。再入国したのだとしたら問題レベルでの、だ」

「がっ、外国人？」

驚かずにはおれない。

「そう見えたか？」

問われて百々は空を睨んだ。

「つていうか言葉だって普通だったし。あの俳優さん似の顔は中国人でも韓国人でもなかったように思う」

「それがコイツだ」

言うレフの背でETCは開き、親指の腹で二度三度、弾いた端末の画面をレフは百々へと

突き出す。のぞきこんだたん百々は声を上げていた。

「うっそ」

「それ、むしろハートに似てませんか？」

投げるストラヴィンスキーの言葉は全くもって言い得ている。エラの張った四角い輪郭に浅黒い肌。天然パーマとぶ厚い唇に黒目がちの大きな瞳。どれをとっても俳優のお兄さんというより、よほどハートにそっくりだった。

「ホセ・マグサイサイ。三十三歳。フィリピン国籍。二年前、裁判所の判決に基づき強制送還を食らっている」

「違うっ！　いくら記憶が曖昧だって言われても男の人だっていうこと以外、絶対違うって言い切れる。あのお兄さん、こんな顔じゃないよっ！」

「ならどいつが仕掛けたのか確かめる」

まくし立てる百々にレフも満足したらしい。それきり端末を胸ポケットへ差し戻すと前へ向きなおっていった。

「予告現場はビッグアンブルです。現場にはもうハナさんとハートが到着していて、ぼくたちも今、そこへ向かっています」

入れ替わりで教えるストラヴィンスキーのそれは、広大な鉄道の引込み線エリアを潰し

て着々と工事の進められている、若人なら誰もが来年春のオープンに期待を寄せる仮想現実を駆使したアトラクションが目白押しの完全屋内型テーマパークだ。無論、百々も心待ちにしていた一人なら、見境のなさに啞然とする以上、怒りはこみあげていた。

「出来上がる前から爆破って……。だいたいこんな時間に建設現場って、誰もいるはずないじゃないですか。あたしじゃなくても犯人なんてすぐわかつちやいますよっ!」

「それが、そうもいかなかった」

早々、食らわされて肩から崩れ落ちる。

「むしろこの状況だからこそ実行に踏み切ったようなフシがある」

言うレフはわずか、体を傾けていた。

「何、どう、いうことですか？」

動きは百々にも、そこに匿われている銃を確かめているのだと知れる。

「本来ならこんな時間には動いていない現場だが、今日に限ってこの天候だ。急遽、作業員が駆りだされて保全作業は行われているらしい。現場には百名近くの作業員がうろついている」

「作業員にでも扮装して映画館の時みたいに現場に紛れていたら大変ですね」
なるほど、きつと皆して同じ作業服のヘルメット姿だ。自分が呼び出されたわけを、こ

こでようやく百々は理解する。

「あは。だからかあ」

その頭上を目的地を記した看板は飛び去っていた。ならってワゴンは高速を降り、一路、鉄道の引込み線があったといわんばかり一切の生活感を欠いた風景の中へもぐり込んでゆく。そこに見えるのは鉄柵に沿って連なる敷きたての道路と、それらを右へ左へ振り分けぶつきらばうに立つ信号だけだ。なぞって進めばどうやら鉄柵こそ工事現場のフェンスだったらしい。搬入口はその先に見えていた。

「まあ、言ったところで入国管理課とのデータ一致に、犯行予告が送られてきたタイミング。てんで合わない指紋と顔写真もです。ぼくたちを攪乱するためのものじゃないかってハナシもあるんですけれど」

目指すストラヴィンスキーがワゴンの速度を落としてゆく。その隣でレフも実に窮屈そうな態勢で、フロントガラスをのぞき込んでいた。

なるほど、そうしなければ視界には入り切りそうもないのだ。建設途中のビッグアンブルはその名の通り、薬液が閉じ込められたアンブルよろしく首と思しき場所から上を細くすると、もう目の前に建っている。

「何もかも俺たちへのあてこすりだというなら、手の込んだオフザケだ」

吐くレフに、ストラヴィンスキーも眼鏡のブリッジを押し上げ空を仰ぐ。

「まったくです。相変わらず要求も何もありませんしね」

なら百々もだった。後部座席からはるか上空へ目をやる。まだいくらか積み足す予定があるらしい。天辺でクレーンは赤いランプを浅く明滅させると、そこに皆の楽しみもまた灯して風に吹かれていた。

「どうしてこんなことばっか、するのか知らないけど……」

思うほどに、湧きあがる気持ちは止まらない。

「待ってなさいよっ、怪盗ソーワットおっ！」

「いえ百々さん、彼らは何も盗んでませんよー」

「だあああ」

つつこむストラヴィンスキーに崩れ落ちる百々を乗せたまま、砂地へ乗り上げたワゴン
は工事現場へと侵入してゆく。

そこに資材と重機は、簡易トイレにプレハブ小屋は点在している。ビッグアンブルは掘り下げられた併設予定のショッピングモール基礎に囲われ、敷地の中央に堂々建っていた。守らんと奮闘する作業員に警察官は想像以上の数だ。悪天候にも負けず張り上げる声をそこに交錯させていた。

やがて中からワゴンに気づいた警察官が駆け寄ってくる。対応するのは例の身分証を掲げたストラヴィンスキーで、任せたレフはすでにシートベルトを外しにかかっている。

「怪盗でも愉快犯でもかまわない。だが身分証と端末だけは忘れるな」

言われてトートバックをまさぐる百々は心配通りだ。急ぎ掴み出したところでレフの手は、そんな百々の前へ突き出されていた。

「貸せ」

「え？」

「端末だ」

不躰な口ぶりには断る、と言う選択肢こそなさそうだ。渡せばイヤホンを取り付けられた状態で百々の元へ返されていた。

「あ、レフが女性へプレゼントですか？」

警官とのやり取りを終えたストラヴィンスキーが再びワゴンを発進させている。

「イヤホンは支給品に含まれていない。領収書はある。経費だ」

「でした。けど今聞いたところじゃ、こっちはそうもスマートな話じゃないみたいですよ」
ゆっくり進み始めたワゴンは、投光器の照らし出すプレハブ小屋へ向かっている。

「ビッグアンプルからの撤退はほぼ完了したらしいんですが、保全作業がまだ残っているか

らということ。地上の作業員はまったく。身元確認もです。ハナさんは先にビッグアンブルへ搜索に向かったようですね、ハートがまだらしくって……」

「ハート、聞こえるか？」

否や、イヤホンを耳にレフが呼び掛けた。

「ありがと、使わせてもらうね」

「チーフへ言ってくれ」

その肩へ声をかけ、百々もまとめられていたコードを伸ばしにかかる。どうやらイヤホンは片耳用らしい。その途中にあるマイクはクリップと一体化しており、首へ巻きつけるようにコードを掛けた百々はパーカーの襟元へマイクを固定し、本体を証明書もろともジーンズの後ろポケットへねじ込んだ。準備万端と顔を持ち上げたならそこに、ずいぶんと大きくなったプレハブ小屋を見つける。傍らに立つ旗から察するに事務所か。その前にはタクトップでバジル・ハートが、作業員と睨み合い立っていた。囲んで似たりよったりのコートを引っ掛けた一団がいるのうかがえる。

「あ、やってる、やってる」

言うストラヴィンスキーはなぜにか楽しげだ。レフはと言えば、そんなワゴンが止まるのを待たずしてもう助手席から飛び出している。ワゴンを停めたストラヴィンスキーもおっ

つけ後を追いかけていったなら、取り残されてようやく百々もドアを押し開けていた。

「わ。ま、待って」

「こっちはワタライに任せておけ」

吹き付ける風に交じり、レフの声を聞く。

「だがこの石頭は作業が終わらんとテコでもここを動かんと言ひ張るッ！」

怒鳴り返すハートはずいぶんご立腹のようだ。

「当然ですよ。気象庁の予測だと進路を変更した大型が直撃ですからね。何かあってからじゃ遅いんです。それともその損失、弁償してくれるとでもいうんですか？ あなた方の小遣い程度じゃすみませんよっ！」

向かって返す作業員は百々にとって怖いもの知らずでしかない。おかげで売り言葉に買い言葉だ。ハートも口を開きかけていた。

「それよりあっちだ」

遮りレフがビッグアンブルヘアゴを振る。

「ワタライ、現状は？」

問うレフを目指して百々は、駆け出していた。

「ごめんっ、遅れた」

ひと思いとその輪に飛び込む。

はずが、食らう視線の痛さは何故。その読まずにおれない空気に気づくまで、いくばくか。急ぎ尻から抜き出したのは例のモノだった。

「ほら、これ。ねっ、コレっ！」

突きつけ回る身分証明書。

おかげで集まっていた視線が散らばっていったとして、それは関わらない方がいいと誰もが思ったせいにほかならない。ワタライこと「渡会」も、だからして咳払いなど挟んで何事もなかったように話し始めていた。

「あ、え、現在、全作業員の身元を確認中。別班はショッピングモール予定地とアンプル内を下から上へ搜索中です。とは言えここはご覧のとおり蟻もムカデも這い出し放題ってな具合でしてね。ただし今回、外周こそ人目がない事に救われていますよ。不審人物がいたなら必ず職質の対象になるはずですよ。逃がすようなマネはもうしません」

「ハナ、どこだ？」

聞いたレフがマイクを引き寄せていた。口論のうちに弾き飛んでいたイヤホンを、ハートもその隣で手早く押し込みなおしている。

「一体、何があったっていうんです？ わけもわからず危険だって言われてもね。勝手にア

チコチいじくって、そっちが怪我したって知りませんよ」

勝手と進む話に作業員は詰め寄るが、ハートにもう応戦する素振りはない。

「三方に分かれますか？」

ストラヴィンスキーがやはり笑顔で確かめていた。答えるべくしてレフは度会へ振り返り、受けて小さく笑い返した度会のつま先は、そのとき作業員へと向けなおされる。そうしてついたため息は、百々にも分かるほど芝居がかっていた。

「頼みますよ、これでも一刻を争ってるんでね。それとも公務執行妨害ってやつを行使しなきゃならないほどのことですか？ 違う意味であなた、一生モノの怪我、することになりますよ」

ままに詰め寄れば、任せてレフはストラヴィンスキーへうなずき返す。

「そうだな、別れた方がいい」

その体がビッグアンプルへと倒れていった。駆け出せば背を追いハートも身を弾ませる。「え？ 何？ どうなるの？」

言う百々が行けないのは、そのスピードよりもまず状況へだ。

「百々さん」

教えるストラヴィンスキーが指示したのは、自身の耳だ。そこにももれなくイヤホンが差

し込まれていたなら、気づいて百々も急ぎつまみ上げていた。飛び交う通信はとたん百々にも聞こえ始める。

「……します。△班、ゲストエリア八階、クリア。同エリア九階へ移動中。□班、バックヤード八階、クリア。同エリア九階へ移動開始。C班、八階機械室を確認中。保全作業中の作業員はすみやかに……」

ガラス張りのあの部屋だ。当然のように光景が百々の脳裏へ浮かび上がる。

あいだにもレフとハートは掘り下げられたショッピングモールの基礎、そこに渡された鉄橋を渡り、打ちっぱなしのコンクリートで囲まれたビッグアンプルへと入ってゆく。レフがその入り口、並べ置かれた懐中電灯を掴んでハートへ投げているのが見えた。

「バジルのBだ」

受け取り言うハートの、その意味がわからないはずもない。

「なら俺はアーベンのAだな」

「でしたらぼくは外田のC班で」

続くストラヴィンスキーへも、どこがCだと懐中電灯は投げ渡される。

「百々さん、聞してる？」

「あ、はい。聞いてます」

と、イヤホンから声はもれていた。

「チーフの指示よ。あなたはレフと共に行動して」

あの赤いスーツの女性だ。

「わかりました」

その淡泊な物言いは百々に余計事を考えさせない。ならこの会話も聞こえていたらしい。前方でレフたちも百々へと振り返る。

「それからビッグアンプルの図面は端末へ転送してあるわ。操作、覚えてるわね。あとオペレーターとの通信は理解できなくても常時モニターしておいて」

「はい」

うなずき返して百々も満を持す。待ちぼうける三人の輪へ加わった。

「じゃ、わたしは百々のDでっ!」

「言ってやがる」

ハートがごつい肩をすくめていた。

「担当は持ち回りか？」

すぐさまレフもマイクへ唇を曲げる。

「以降はチーフに確認して」

とそこへ新たな声は割り込んでいた。

「ちよっと、セサミストリート諸君！ 早く上がって手を貸してくれないかしら。わたしたちが相手にしているのはこの気象条件もよ」

常盤華だ。言い分こそ間違いなく、だからしてそのとき光景は百々の前へ立ち上がってもくる。それは今日、いやもう昨日になってしまったか、試写で見たスクリーンの光景で間違いなかった。吹き付ける嵐の中に立つ今だからこそ、美しくも厳しい自然と、そこに順応して暮らすしなやか動物のたたずまいは手に取るように思い出されて、むしろ自分もそこにいるような錯覚を抱く。

「……大自然の驚異っ！」

脈絡なく放つも致し方なし。

「ならいくか、アニー」

目もくれずハートがレフを促していた。

「ああ。最上階で会おう。ビッグバード」

レフも返せば互いの足は、それぞれの方向へと向けられる。

「いくぞ、クッキーモンスター」

ついでと、握りこぶし震わせる百々をレフは呼び止めていた。

「あたし、あんなじゃないってば。あたしはどっちかっていうとエルモでしょっ！」

ともかく自分用の懐中電灯をラックから引き抜く。追いかけて百々も足音を響かせた。

「ああ、見にくい」

などとセサミストリートイベントも終了してしまえば百々のテンションも下がる一方となる。何しろ現状、レフに従っていれば事足りるとして、自分がどこにいるのかすら分からないのだからこれが落ち着かなかった。だというのに確かめるべく開いた地図は設計図もそのままと、とにかく分かりづらい。

そんな場面でも要領を得ているのか、レフは器用に画面をスクロールさせながらここゲストエリアの九階で進められている搜索へ加わるべく、着実に道を選んで進んでいる。迷路のように連なる空間を通り抜けると、苦もなく外壁に業務用エレベータと階段が取りつけられた空間へ向かっていた。

「そっちじゃない。周りを見ろ」

端末へかじりついたままの百々へ投げる。

「だって、ここがどこなのか分からないと落ち着けません」

「それは俺が把握していればいい。ここにあの男が紛れていないか、お前はそれだけを注意

していればいい」

しかしながらたどり着いたエレベータは十三階に止まったままだ。レフの手が「上」と書かれたボタンを押し込む。

傍らでわかっているケドと言う代わりに、ようやく百々はここが完成すれば十五階建てになるらしい事を、現在はその十三階までが組み上がっており、三班に分かれて捜査が進められているようにフロアは「ゲスト」「バックヤード」「機械室」の三エリアに分断されているという事を把握していった。くわえて上下移動にはどのエリアも、こうしたエレベータと階段が一組ずつしかない事を知る。

納得して顔を上げればちょうどだった。カゴは滑り降りてきていた。さすが業務用である。ガシャン、と音を立て止まったその扉は手動式らしく、フック型の留め具がワンポイントと光っていた。しかもシースルー感抜群と、カゴは落下防止のネットを張っただけの檻で、足元に至っては無数の穴が開けられた鉄板ときている。

「八階到着、C班と合流」

乗り込めばストラヴィンスキーの声がイヤホンからもれていた。

「今、エレベータの中にいる。こっちもすぐだ。九階に到着する」

扉を閉めたレフが並ぶボタンの中から「9」と書き込まれたボタンを押す。

強風にあおられながら上昇してゆくカゴは切れて落っこちやしないか、百々をひやひやさせてならなかった。その心配をよそにカゴは三階をやり過ごし、順調に四階へ昇ってゆく。渡会の一喝が効いたのか、その頃には全作業員への撤収命令が出されていた。加えて最上階の保全作業に向かった作業員がまだビッグアンプル内に残っていることもまた告げられる。

「ハナ、人数はまだ確認できていないけれど彼らは十三階のそこ、ゲストエリアから引き上げると言ってきたわ」

赤いスーツの女性の声だ。

「今、レフと百々さんがエレベータを使っている以上、退避には非常用の階段を使う可能性が高い」

つまり見逃すな、ということらしい。

「了解」

心得たハナの返事は早く、そのとき思わぬ光景は百々の目へ飛び込んできていた。

「わあ、キレイ」

気づけば眼下は眩いばかりのネオンの海だ。

「周りを見ろと言ったが、そっちじゃない」

すぐさまレフに注意されてみる。

「す、すみません。高いし、揺れてちょっと怖かったので和んじやいました」

そんなエレベータはもう六階へ辿り着こうとしていた。どうやらハートもひと足早く九階へ到着したらしい。野太い声が知らせ、続けさまストラヴィンスキーの同じく九階へ向かうと言う声も届く。

片耳に百々は笑ってやり過ぎし、だからこそ意識せずにおれなくなった足元へ目を向けていった。

「怖いなら足元は見るな。前だけ見ている」

これまたレフに言われてみる。

が、四十五度。はたまた九十度だ。百々は首を傾げてゆく。次の瞬間、ぎゃあ、と叫んで飛び上がるが早いか、すでに狭いエレベータの端を探してこれでもかと後じさっていった。

「落ち着けッ……」

絞り出すレフはむしろ、違う言葉を吐きたそうだ。

だとして百々は懸命にアゴを振る。振って足元を見る、とにかくレフを促した。

応じて振り返ったレフはもう睨み返すついでのようにおっかない。百々の視線を渋々なぞり、やがて足元へと目を落としていった。ならそれは鉄板に空けられた穴の向こうだ。

街のネオンに紛れて刻々、この度も時を刻む赤い表示はレフの目にも飛び込んでくる。

「ぶうあつ、爆弾、ありましたあつ！」

百々の声もまた、そのときマイクを通して散っていた。

「どうりでまだ見つかっていないはずだッ」

吐いたレフが長身を折る。

「どこだ！」

聞いて動き始めたらしい。荒い息遣いと共にハートも吠えた。

「ゲストエリア付、エレベータ基底」

そのエレベータはもう八階に達しようとしている。

「ハナ、このエレベータは確認したのか？」

確かめつつ、足元の穴へレフは指をかけた。

「ノーよ。下から階段を使って上がった。階段からシャフト内は確認させたけれど、エレベータは最初から上にあったの。まだ中まで目を通してない」

取り外せるのか、揺さぶり確かめるが自分たちが乗っているのだ。鉄板はびくともしない。

「あと何分です？ レフ」

割り込むストラヴィンスキーに穴の向こうへ目を細める。

「八分……、ある」

「作業員が降りてきたなら、わたしとあなたで身元の確認を。残りは爆発物の処理に」
耳にしたハナの判断は早い。

八階を過ぎたカゴはそんな処理班の待つ九階へとせり上がっている。まもなくハナの指示と噛み合うだけの靴音は降り、待ち構えて見上げた視界の中、仁王立ちとなった足は下りてきた。だが同じく見上げた百々の中に安堵こそ沸いてこない。案の定だ。エレベータは九階フロアをそ知らぬ顔でやり過ごしてゆく。

否や、レフの拳が緊急停止の赤いボタンを叩きつけた。止まらないなら上層階、全てのボタンを押し込んでゆく。それでもエレベータは止まるらない。

「クソッ」

見限るレフが扉へ食らいついた。こじ開けにかかればけたたましい音は鳴り、百々は体を強張らせる。そんな扉は手動だからこそ稼働中、勝手と開閉できないようロックされる構造なのか。レフの力でもってしてもフックは外れない。

今度こそ真っ黒焦げだ。などと百々の脳裏に浮かぶ映像がコントなのは、脳内にさえモザイクが入っているせいだろう。果てに、先に上がった何某が無事エレベータを降りた

ラッキーを恨んでみる。どうして自分の時に限って、と呪ったところで過る違和感に眉を段違いとへこませていった。

「そうだよっ！ エレベータは上にあったってことっ！」

知り得た事実は実に単純だろう。

「それはもう知っている。今はそのエレベータが爆発物らしきものを抱えて止まらなくなっ
たッ」

言うレフの目は、扉の構造を辿り忙しく動いている。

「違うってばっ！」

たまらずカゴを押し出し百々は、そんなレフの前へ飛び出していた。

「このエリアにエレベータはひとつ。最初から上にあった。あって、下ろしたあたしたちが乗ってから止まらなくなった。それってきつとあたしたちが乗る前まではちゃんと動いていたってことなんだよっ！」

なら伝わったのか、レフの動きはそこで止まる。面持ちは虚を突かれたようで、やがて色の薄い瞳は百々へと向けなおされていった。

「つまり爆弾は、十三階で降りた奴が仕掛けた。そう言いたいのか？」

顔へ深く百々はうなずき返す。前でレフはその目を再び蛇腹扉へ向けなおしていった。や

おら伸ばした腕で百々の体を背へ押しやる。もろとも後じさったなら懷から銃を抜き出した。

乗せたエレベータは単調な上昇の果てにもう十階だ。

探し当てた扉のひと所へ引き金を絞る。

食らいついた弾丸は二発。オレンジ色の火花は飛び散って、嫌って小躍り、百々も負けじととっ散らかった。

「たっ！ とおっ、危ないっ！」

「十三階へ向かった作業員はいるのかッ？」

かまわずレフは扉を蹴りつける。

「はい。先ほどゲストエリアから退避すると連絡のあった作業員、マニュアルではクレーンの保全作業に向かった運転士がそうです」

耳障りな音はシャフトにこだまし、答えて返すオペレーターへレフは大きく舌打った。

「くじ運、悪いな。仕掛けたヤツは運転士の中にいる可能性が高いぞッ」

共に繰り出す最後のひと蹴りで、ついに扉のフックをねじ切ってみせる。

と足音は、見守る百々の頭上へ降っていた。十二階のフロアがカゴの上部にのぞいた時だ。隣接する階段越し、撤収を命じられ地上へ向かうクレーン運転士たちとすれ違う。

「あっ」

追いかけて格子へ額をすり寄せていた。あっという間に遠ざかってゆく顔から顔へ、体から体へ、百々は懸命に視線を走らせる。

「ハナさん。作業員が降りてった。でもあのお兄さんはいないよっ！」

間にもエレベータはスルスルと十二階を通過してゆく。

任せて扉をこじ開けるレフは、ようやく開いたその隙間へ肩をねじ込んでいる最中だ。

百々もうっすら底を割り始めた頭上へアゴを上げる。際限ない上昇の底は割れると、そこで不気味とワイヤーを巻き上げるウインチは見えていた。のみならず見えたもう一つの影に声を上げる。

「レフっ！」

「わかってるッ」

答えたレフの前に十三階のフロアは広がる。

「降りるぞッ」

手が百々の胸倉を引っ掴む。同時に放たれた弾は闇雲で、まさに飛び散る火花めがけレフは肩から十三階へ突っ込んでゆく。

「ぎゃあっ！」

十三階側の蛇腹扉がしなっていた。押し倒してむき出しのコンクリートへ、百々はもつれあうように身を投げ出す。

「いつ、たあっ……」

暗がりでも分かるほどだ。辺りに埃は舞い上がっていた。百々はむせ、蹴散らし迫る足音のけたたましさに歪めた顔を上げてゆく。めがけ投げ込まれた光に目を細めた。

「テロ、リストより爆発物、に好かれていようで、何よりだ」

ハートだ。防護服姿の三人を引き連れると、息を切らし立っている。

「たまたま、ですっ！」

唸ったそのとき、振り返らせて寒気のような音は鳴っていた。めいっばいロープを巻き上げたウインチは今や、シャフトでミシミシ、カゴを食っている。だが咀嚼するには少々固すぎたようだ。尻をのぞかせる格好でカゴは、やがて動きを止めていた。おかげで宙吊りと、貼り付けられた爆発物もまたそこに晒され揺れる。

「どうしていつも五分を切って俺に預ける！」

見据えたハートの安全靴が百々をまたいでいった。

目で追いレフも立ち上がってゆく。

「残れ」

百々へ指示した。だとして百々にもそろそろ要領なら分かり始めている。返事をするその前に、いつの間にか飛んでしまったイヤホンを耳へ押し込んだ。交わされる会話から下りて行った作業員の中にお兄さんはおろか、ホセ・マグサイサイもまたいなかったことを拾い上げる。

「探しにゆくのか？」

問う百々の眼差しは厳しくならざるを得ない。

「ここは任せたぞ」

答えないレフはただハートへ投げている。

「もうすぐストラヴィンスキーが上がってくる。それまで待て」

返すハートは目もくれず、美術品でも鑑賞するかのように貼り付けられた箱を見上げていた。かと思えばその体を防護服の三人へひるがえす。

「貴様らっ！ こういう仕事は何はともあれ体力が肝心だ」

そこから先に待ったはない。

「いいか、俺を掴んでいろ。絶対に離すなッ！」

背からシャフトへ倒れてゆく。

「わ！」

「冗談っ！」

「落ちる！」

目にした防護服三人のロケットダッシュはさすがだと言えよう。間一髪、ハートの足にベルトを掴んでみせる。

「お、もっ……！」

「何、食ってんだあ、コンチクショー」

甲斐あってついた角度はちょうど、ハートを箱の真下に潜り込ませていた。

「うるさいぞッ！ どっちへ転んでもあと四分だろうが。グダグダいわずにやり通せッ！」

「神経質なやつだな。もう、もぬけのカラかもしれない。そいつを確かめにゆくだけだ」
眺めるレフが突き返している。とたん静止してイヤホンから声はあふれ出していた。だからこそレフの手はマイクごとイヤホンを払い落とす。歩み寄ると呆然とする百々の傍らから、投げ出されていた懐中電灯もまた拾い上げた。

「借りるぞ」

「あ、それ、さっきので壊れたっ！」

咄嗟に言うが、スイッチオンで終了だ。光は互いの足元を丸く照らす。

「……な、なんてね。あは、あは、あは」

笑えども通じぬレフの表情は冷め切っていた。返すきびすでハートたちが現れた方へ駆け出してゆく。

「ちょっと、一人じゃダメだって。危ないって、みんながっ！」

呼び止めるが百々ごときに何の効力があるうか。

「……白いツラだからといって冷静に見えていると思うな、アニー。だから貴様はドドをかまされたんだろうが」

マイクの拾ったその声に、百々の方こそハートへ振り返っていた。かき消すハートはそこでこうも声を張り上げる。

「いいかストラヴィンスキー、俺は手が離せんッ！ 今すぐ上がって奴をフォローしろ。今すぐにだッ！」

ゲストエリアの階段には作業員を誘導するハナたちがいた。機械室はストラヴィンスキーがエレベータの動きを確認しつつ階段を移動している。つまり抜け道があるとするならハートが抜けたバックヤードが相当だった。

建設中の最上階はその完成図があるだけで、現在どうなっているのかは上がってみなければ分からない。ゆえに情報が欲しいところだったが、小うるさいイヤホンを払い落とし

た今、ナビゲートこそ頼めそうもなく、いや頼んだところで却下されるに違いなく、レフは端末の図面をまた拡大してゆく。見つけ出した道に従い、迷路のようなビッグアンプルを屋上へと向かった。

その最後の直線は思いがけず長い。ひと思いと駆け抜け、くり貫かれた入口の傍らへ身を添わせる。

明かりは点けない。息を整え、わずか中へと視線を投げた。

そこに空間は車なら八台ほどが駐車できそうな具合に広がると、がらんどで何者かの侵入を待ち構えている。あるとすれば頭上を支える剥き出しの鉄骨だけか。外壁の代わりに貼られた落下防止用のネットだけが片側で、風に膨らみ大きく揺れて動いていた。屋上へ伸びる階段はそんな空間の奥に架かると、数度の反転を繰り返しかぶる天井の向こうへ消えている。

正面へ向きなおった。相手が多量に火薬を使用する輩なら銃もまたその範疇だろう。丸腰だという保証こそなく、手のひらへマガジンを落とす。残弾を確認して押し込みなおし、引いたスライドで装填した。

懐中電灯のスイッチを入れる。掲げてレフは、中へ足を踏み入れていった。

「向かってますけど、上、建設途中で、上がれないみたいじゃないですか。レフはどっちから上がったんですか？」

ストラヴィンスキーの口調は苛立しげだ。

「悪いけれど作業員を渡会へ申し送るまで離れられないわ」

ハナこそ現地点では、容疑者と行動を共にしていた矢も知れない重要参考人の誘導中だ。
「わからん。だが俺の来た方向へ走っていったぞ」

体を掴まれたまままで返すハートの手は止まらない。

「じゃあ、バックヤード側から上がったんだ。ですけどここ、ソッチへ行くには一旦、降りないとどうも繋がってない、んですよ……」

端末の図面を繰っているのだろう。最後を独り言のように漏らしてストラヴィンスキーは語尾を濁す。ならつかまえて上層までのナビゲートを申し出たのはオペレーターだった。
「これで全員ですね」

重なりマイクが、作業員へ確認するハナの声を拾う。

全てを耳にしながらそのとき百々も懸命に考えていた。何しろレフの行動はある意味、正しい。だからして一人、駆け出していったことは重大だとも思っていた。見間違いであればこしたことはないが、百々はカゴの中で頭上に確かと動く人影を見たのだ。

とハナに答える作業員の声をマイクは辛うじて拾い上げる。

「いやあ、もう一人いたんですけど、忘れ物を思い出したからバックヤード側から下りるって上で別れましたよ。もたついていたら彼が最後です」

瞬間通信は、のんだ息にオペレーターのものさえ一瞬、途切れた。

「俺は誰も見てないぞッ!」

即座に返してハートは怒鳴る。それこそあの人影だ、百々は両目へ力を込めていった。否や探して辺りをまさぐる。そうして取った行動は今でも正しかったと言い切れた。だからして見つけて駆け寄り、奮闘続ける防護服の腰周りからフラッシュライトを筆り取る。

「コレ、借りるねっ!」

「あ、ちょ、何を」

手の離せない防護服を放って、襟のマイクを引き寄せた。

「外田さん、あたしが先に上へ行きます。できるだけ早く上がって来てくださいっ!」

だとして苦手な図面を読んでいては間に合わない。レフと同じ経路を辿る無謀は諦め、百々は目の前、エレベータと平行して伸びる階段へ顔を上げた。

「ここから動くな!」

止めて足元へ剥がされた箱のカバーは投げ込まれる。だが百々が身をすくめたのは一瞬

ただだ。

「どうしてですかっ？ そいつが犯人ですっ！ だのにレフが一人じゃ危ないってことはわたしにだって分かります。だから外田さんが来るまで無茶しないよう、待たせてきます。じっとしてる場合じゃないっ！」

とたんレフがイヤホンを払いのけたワケが理解できるほど、ストップの指示は繰り返えされた。煽られ、それこそ間違いを起こしそうになったなら百々も耳から引っこ抜く。

「バカ野郎が、そいつはくたびれ儲けだッ！」

駆け出す背にハートの声は飛び、手すりを掴んで百々も突き返す。

「だってあたし、エレベータで上に誰かがいるの見たんだもんっ！」

最初一段へ身を躍らせた。

二度の反転。

階段は三度目を繰り返すことなく、その先を夜空に架けていた。時折、下へ視線を投げると動くモノは見当たらない。上り詰めたそこからレフはそっと頭をのぞかせる。

吹きつける風がごう、と唸って聴覚を奪っていた。敷き詰められた床を地平に変えて三百六十度、くまなく辺りを見回してゆく。

高所だからか。そこに資材らしい資材はなかった。次の作業のための足場として、やぐらのように組まれた鉄骨だけが床から突き出している。間に、周囲に、ハーネスを固定するワイヤーは張り巡らされると、敷き詰められた床は幾らか向こうで切れてもいた。そこから先は剥き出しとなった鉄骨だけが空へ橋を架け、積み上げたろうクレーンが一基、長い腕を立てそびえている。さらにその向こう、似たような床の島は闇にぼうつと浮かび上がると、向かい合うかたちでそこにも同じく修行僧かと、一基のクレーンを鎮座させているのが見えていた。

懐中電灯を床へ放り上げる。なるべく姿勢を低く保ちレフは、最上階へ身を持ち上げた。ついで下の様子が知りたくなりイヤホンを摘み上げるが、浴びせられたばかりの声に諦める。代わりとばかり背後へ振り返った。耳を澄まし目を凝らす。だが強すぎ風のるせいで何者かがいるもない、気配というものがまったく伝わってこない。

諦め、組まれた鉄骨の影へ懐中電灯の光を向ける。風にもまれながら床の端まで足を進めた。途切れたそこから谷のようにえぐれた建設途中の足元へ光をやり、なぞって持ち上げクレーンの運転室もまた照らす。

と荒い息は背後から聞こえていた。

振り返れば目と鼻の先を何かはかすめる。

その近さにも勢いにも、咄嗟とレフは身を引いていた。なら前のめりとなった頭の「安全第一」とプリントされた黄色いヘルメットは目に飛び込んでくる。踏みと留まったその短いツバは、わずか浮きあがって奥から光る目玉を二つ、のぞかせた。

めがけて殴り返すより先だ。懐中電灯の光を突きつける。銃口もまたそこに沿わせてレフは声を張った。

「作業員は全員退避の指示が出ているはずだぞ。それとも作業員はの格好だけかッ」

眩しさに両手を振り回し後じさった黄色いヘルメットは、開ききった瞳孔をかばっている。問いかけに、やがてその腕を顔の前から下ろしていった。瞬間レフはある意味、百々は間違っていないかったのだと思ひ知る。露となったその顔は確かにあの俳優そっくりだった。「思ったより早いな。爆弾、解除しなくていいの？」

その端正な顔立ちで、男はレフへ笑いかける。

エレベータのカゴ同様、階段室もまた荒い造りが工事現場そのものだった。おかげで風は縦横無尽に吹きつけると、街の喧騒を、接近しつつある台風の湿り気をあますところなく百々へ伝えよこす。

だがもう下を見ても怖くはなかった。使命感もさることながら、のっぴきならぬ状況に

映画譲りの「野生」が百々を奮い立たせる。いや勝手に重ねて本人だけがその気になった。なら「その気」が連れ込むのは根拠のない自信で、果てに火事場のクソ力は失速させることなく百々を最上階まで上り切らせる。せいや、で途切れた手すりを押しやり百々は屋上へ体を持ち上げていた。

吹き荒れる風に背を押され、意思とは無関係に一步、前へ踏み出す。踏ん張りなおして百々は闇を睨みつけた。

「レフっ？」

思い出し明かりを点ける。だが風鳴りが強過ぎて返事こそ聞こえてこない。見えるものはいえればレールの上に乗った無人のクレーンに、その脇で青いビニールシートをかぶせられた資材だけだ。しかもその先で床は切れると建設途中のビッグアンプルは、鉄骨を剥き出しにして大きく窪み行く手を阻んでもいた。

いないのか。思い百々はイヤホンを耳へ押し込む。

「レフ、どこ？ アニー、聞いている？ こちらクッキーマンスター。最上階よ。おなががすいたのエサちようだいっ！」

返事を待ってしばし黙る。だが返されてきた声は一層下りてバックヤードエリアへ移り、呼び寄せたエレベータに乗り込んだことを知らせるストラヴィンスキーの声と、解除に成

功した爆発物の中にあの弾がないか確認する、と告げるハートの声だけだった。レフの声こそ聞こえてこない。

まるきり無線を聞いていないのだ。思うしかなく、それは素人目にもあり得ない行動だと感じられてならなかった。それでもいつレフの声が混じるやも知れない。会話を傍受しつつ建設途中と窪んだエリアの手前まで、腹で風押し百々は進む。ワイヤーが張られた低い柵越し、目立つはずの長身を探してなるほどストラヴィンスキーがストレートに上がってこれないはずだとひとりごちた。

建設途中の窪みはストラヴィンスキーのいた機械室一帯だ。足場にしてそこにはもう一基、クレーンも立っている。百々はそんなクレーンの運転室へ、辛うじて光の届くフラッシュライトを向けた。動くものがなかったなら、さらに視線を遠くへ投げてみる。

そこにはこの場所と同じような床があった。

灯もなく霞んで暗い。

だが確かにそれは百々の目に映っていた。

懐中電灯の光はそのとき、チラチラ瞬く。

息を飲んだのも束の間だ。向かって百々は声を張り上げていた。

「解除は専門のやつが担当だ。五分もあればカタがつく」

懐中電灯を握る手をひねった。レフは手首の文字盤へチラリ、目をやる。逸れた光を男へ再び突きつけなおした。

俳優似の男はそこで映画館で見たのと寸分違わぬ姿勢をとると、どうやら気配に振り返ってかすめたものはハーネスを足場につなぐロープ、ランヤード、その先端にあるフックだったらしい、握り絞め、今もなお繰り出す様子をうかがいにじるように右へ足を滑らせている。

「過ぎた。ゲームオーバーだ」

教えてやるに越したことはない。

「まさか。しくじったりするわけないよ！ 僕も仲間になるんだ。けれどそれまでの間、もう少し派手にアピールするならあんたに怪我を負わせるべきだと思うな。それで僕がどれだけ本気かってことも伝わる。あんた！ 一人で来るなんて馬鹿だな。僕に仲間がいるかもってことは想像しなかったの？」

まくし立てる男の笑みが光の中で歪む。

「首謀者は誰だ。貴様らの要求は何だッ」

答えず返せば、ヘルメットのフチを滑るように視線を左へ流した。正面へ据えなおすが

早いか大きくうなづく。

「そっか。残念ながらそう簡単に撃てやしないよね。聞きたいことが盛りだくさんにある。とっとと捕まえて僕の情報が欲しい」

肩をすくめた。

「向こうで誰か呼んでるみたいだけど？」

善意とばかりつけ足し言う。だとして振り返るバカこそいないだろう。レフも男へ繰り返してやることにする。

「俺の仲間が駆けつけるまでもう少し成果をあげておくなら、お前に怪我を負わせるべきだろうな。犯罪者がそう生易しい扱いをされると思ったら大間違いだ」

否や、みる間に強張り青ざめていったのは男の頬だった。反して目の周りだけに赤く血を滲ませてゆく。

「全ての娯楽に肅清を！」

声は唐突なほどと大きかった。

「与えられる楽しみは全て、楽しむことを義務付けられた労働だ！ 世界に真の喜びへの門戸を開く！ 我々は犯罪者などではなあいっ！」

揺れる肩が。

「我ら偉大な革命の師はその日に備え、眼が開き、自らの頭で考える事のできる同志を募った。申し出、その意志が本物である事を示したなら必ず迎えは僕の元にもやって来る」

「そのための爆弾騒ぎが、これか？」

問いに男は答えなかった。ただ大きく空へ腕を広げる。

「僕もついに革命の同志だ！ 退屈で搾取するためだけのエセ娯楽から全てを救う！」

「ふざけるなッ」

放ったレフの一喝にはしかしながら、感情的な響きは一切ない。

「お前を迎えに来たのは俺だ。お前にはもっと愉快的仲間と話が待っている。ただそいつは娯楽じゃない」

なら広げた手もそのままに、男はぐっとアゴを引いてみせた。ヘルメットの縁からのぞく目をこれまでにないほどと挑戦的に光らせる。

「合図の狼煙が上がれば目がけて迎えはやってくるよ。残念だけどそういうコト。爆弾の解除は間に合わないって、言ってるだろ」

「……どういふ、ことだ？」

だからしてハートは眉間を詰める。その背後には息の上だった防護服たちが転がり、床

にはバラし終えた箱が置かれていた。つまり解除は無事完了している。だが仕込まれた火薬は音がする程と味気なく、必ず見つかったあの玉はどこにも仕込まれていなかった。

流れ落ちた汗がまた床にシミを作る。

犯行予告が送りつけられたというのに、これは全くの別件なのか。分解されてあられもない姿を晒す箱へくまなく視線を走らせていった。そのたび違う、と訴えかけてくるのは内なる声だ。それは勘などという曖昧なものの一線を画し、この箱はまるで無意味だとハートへ語りかけていた。なぞりハートもこの箱には意味がない、と口の中で繰り返す。ならあるべき意味は、あるべき彼らの目的はどこへ消えしまったというのか。そこでいや、と思いとどまっていた。そう、犯行予告はあれほどまで手の込んだやり方で送りつけられたのだ。消えるはずなどありはしなかった。犯行の目的は必ずどこかにある。ただ気づいていないだけで、それは必ずどこかで何かを吹き飛ばすハズだと思えた。瞬間、しまったとハートは両目を見開く。

イヤホンからもれるのは百々がレフを見つけたと、たぶんそうだと言う馬鹿でかい声だったが、かまっている場合でこそない。声はそれが本人の意図するところであろうとなかろうと、負けず劣らず大きくなる。

「こいつは囷だ。本物はほかにある！」

屋上で、レフもまたこれでもかとマイクを引き上げていた。ハートのしがみつく箱こそダミーだ。男の余裕に間違いないと確信する。吹き飛ばしてそのとき爆発音は轟いていた。衝撃に体を前へ投げ出される。嫌な予感ではなくそのものを覚えてレフは振り返った。ショッピングモール基礎の一角からだ。この風にも負けず煙は立ち昇っている。勢いにも規模にも思わず釘付けとなっていた。やがて火葉の匂いが、熱が、風に混ざってレフの頬をなでてゆく。視界の端で男は動いて、我に返っていた。

腰回りから男は、工具ではなく回転式の銃を引き抜いている。その銃口はレフをとらえ、起こされゆく撃鉄に回転するシリンドーがギリリと音を立てる。

「動かないでください！」

制して声は組まれた鉄骨の向こうから投げ込まれていた。かざした銃ごとストラヴィンスキーは現れる。とたんためらうことなく駆け出す男は「20世紀CINEMA」と変わらず、警告に二度目こそなかった。

ストラヴィンスキーがトリガーを引く。

男を追って着弾の粉はコンクリートで弾け、縮んだその距離に足をすくわれ男は身を投げ出す。ハーネス用のワイヤーに引っ掛かると転落まぎわで押し留まってみせた。

「風、強すぎますよ」

詰めていた息を吐いたストラヴィンスキーがレフへ視線を投げる。合図に互いは男へ歩み寄っていった。

最中、引き込まれたかのように目指す体が滑って落ちたなら、何がどうしたというのか、二人は残りを駆ける。のぞき込んで一段下の足場に、鉄骨の上を谷と窪んだエリアへ走る男を見つけていた。よじれたその背が振り返る。それが発砲のためだったとして身を屈めたのは単なる条件反射だろう。それこそこの強風の中、素人射撃が当たるはずもない。銃声は風に散り、二人も急ぎ男を追い上げる。途切れた床に立ち止まったならレフが絞った引き金で、最後の排莢にスライドが開き切るまで撃ち尽くした。

浴びても振り返ることなく走り続ける男は、それもまた威嚇だとたかをくくっているからか。

見送り空になったマガジンをレフは落とす。

「容疑者を発見しました。似顔絵の男です。機械室エリア最上部、建設途中の鉄骨部分を東に向かって逃走中」

隣でストラヴィンスキーがマイクへ吹き込んでいた。

「奴は仲間が迎えに来るといっていた」

「あと容疑者を迎えに仲間が来るとも。至急、東側の手配、周辺の警備強化をお願いします」
教えてレフは予備のマガジンを押し込む。

「どこからだ？」

探して辺りへ目をやった。

うちにも男はクレーンの足元へ辿り着き、そこで再び発砲を始めている。闇を照らして跳弾がストロボと瞬いていた。その瞬きはやがて何者かの影をつないでそこに浮かび上がらせてゆく。

「仲間、か？」

「です……か？」

だが目を凝らせばわけではない。ストラヴィンスキーも眼鏡のブリッジを押し上げ言う。
「ああ。あれ、百々さんですよ」

「ふんぎゃー」

避けるも何も小躍り、大踊りだ。だからしてそのとき百々は飛び来る弾丸に喚き散らしていた。何しろ「オトリ？」と繰り返した百々の前で火柱は吹き上がり、破裂音の連続が追い打ちをかけたかと思えば、レフとストラヴィンスキーともう一人、あのお兄さんが駆け

て来るのを目にしたのだ。とたん逃げると言うアイディアは百々の中から失せて、怒り心頭、フラッシュライトを差し向けたのが最後だった。乾いた破裂音は鳴り響くと、身近で見覚えのある火花は散り、つまり発砲されたのだと理解するまで数秒のタイムラグ。経て正解と追加されたご褒美こそ、この弾丸となったのである。

「ぎゃー、ぎゃー」

「どうしてお前は、そんなところにいるッ」

レフの声だ。

「言われる筋合い、なあいつ！」

呼んで答えず、呼ばずして怒鳴りつけられるこの不条理はいかに。ともかく百々はクレインの影へ転がり込む。

「へ、へったくそーっ！」

「頭を出すな。明かりを消して誰か来るまでじっとしていろ。よほど運が悪くなければ当たりはしないが、お前なら当たりそうではないッ」

悪態をついてすぐ、言うレフの発言の意図が汲めずに速攻で喰る。

「あのねっ、縁起でもないこと言わないでくださいっ！」
だがそれきりだった。ピタリ止んだのは発砲だ。

何がどうしたのか。不気味に思わぬわけがない。クレーンから百々はおっかなびっくり顔をのぞかせていった。そこでフックを掛けかえ運転席へ向かいハシゴを登る男を目の当たりとする。

「クレーンに登ってるよ、アイツっ」

「もういい。お前の仕事は終わった。下りろ」

言ううちにも百々と同じ高さに辿り着いた男は、成り行きからして百々が反撃に出ることはないとな力をくくっているのだろう、実に落ち着いた手つきでフックを外すと百々へ堂々、下げた頭で挨拶さえしてみせる。

起こし、懷から筒状のモノを取り出した。へし折り高く空へかざす。とたん吹き出す火花に白煙は圧倒的だった。強風にもかかわらず、あっという間に辺りは白くけぶり始める。「……何。こっちへ逃げるんじゃないの？」

もう目が離せなかった。

いや離すべきだったと気づいた時にはもうすでに、持ち上げられた銃は再び百々をとらえた後となっている。まさに銃口は跳ね上がっていた。時が止まり、腰が碎けて手足が失せる。遅れて百々が目を閉じたのは、そこから先を見たくなかったからだ。

だが響くはずだった銃声こそ聞こえてこない。代わりに模した男の口だけが「ばぁん」と

大きく開かれていた。閉じてブーツ、と吹き出したなら、タネを明かしてシリンダーは外される。すでにカラのソレを振る男は、そうして辛抱たまらんと笑い出していた。

「何をやってる。聞こえていのかッ？」

呆然としていた百々に瞬きが戻ったのは、言って急きたてるレフの声が聞こえてからだ。
「聞こえていながら早く離れろ」

促されてようやく両の足へ力もまた戻っていた。だがそうして立ち上がったのは、逃げるためでこそない。

「いや、だ」

絞り出す。

そうして男をただ睨んだ。

そう、ひどくからかわれたのだ。それも二度にわたって死ぬかと思うほど怖い思いをさせられたうえで、だった。だというのにその相手は無防備極まりないツラで今、天地がひっくり返るほど笑い転げている。引き起こした足元の惨事すら氣にとめず、これでもかと馬鹿笑いを繰り広げていた。前にして逃げ出すなどとあり得ない。いやそれこそ屈辱以外の何ものでもなく、そもそも相手はとことん百々を見くびると、もう丸腰であることさえ明かしてしまっているのだ。

「バカに、してんじゃないわよ……」

二言目が百々の口からもれていた。

「発炎筒じゃないですか、アレ？」

ストラヴィンスキーの声が聞こえて、ああ、これが発炎筒なのかとも思ってみる。おかげでなるほど、と気づけたのは、逃げるつもりでいる男が左右を塞がれたここで発煙筒を焚くその意味だ。

「はっ、バカと煙は高い所へ上がりたがるって、そういうコトねっ！」

同時に為すべきこともまた百々の中で決する。

「冗お談つ、そうはさせるもんですかあっ！」

だが悲しいかな手立てがなかった。それでも探して床へ視線を這わせる。そこから生えるクレーンをなぞり、百々はアゴを持ち上げていった。

「きりん一号」

目へ飛び込んできたのは側部に貼られた看板だ。とたん蘇ってくるものがあるとすれば、それは感動冷めやらぬ数時間前のスクリーン、そこで激しく首を打ち付け合う二頭の獣の

姿だろう。つまり男の乗るそれは「きりん二号」か、はたまた見た目から「フラミンゴ一号」か。巡らせる百々の頬へ、やおら不敵な笑みは浮かび上がる。

「よおっく聞きなさいっ!」

ビシリ、指を男へ突き付けた。

「笑ってられるのもそこまでよっ。野生の怒り、しかと思い知らせてやるうっ!」

などとそのだけ聞けば意味不明だが、放った本人には筋が通っているのだから入った力こそ並大抵のものではない。

「は? なんだと?」

イヤホンから漏れる誰ぞの声もそこそこに、返した肩で百々はクレインのキャットウォークへ飛び上がった。エレベータよりシースルー感アップ、手すりを頼りに運転席へと向かう。谷へせり出たその位置で、えいっ、とドアへ飛びつけば、こんな僻地の持ち運び不可能な重機を盗もうとするわけも、中に貴重品が匿われているわけもないドアは開いていた。汗臭い一畳間の真ん中に固そうなシートはある。めがけてどっこい、百々は尻を投げ出した。窓に囲われた運転席はまさにコクピット。全方向、死角ゼロだ。ペダルにレバーも投げ出した手足の位置へちようどと探す必要すらない。

「で、どこどこ。どこで動かすのっ?」

残るは起動だと探して回った。

あいだも救急の到着を告げてオペレーターの声はイヤホンからもれ、容疑者発見の一報に整えられてゆく確保の段取りが無線の中を飛び交い続ける。

だとして地上からでは間に合わない。百々は焦りを募らせた。鍵穴を、フロントガラスの下、ダッシュボードのように突き出た場所の右に見つける。だとして肝心の鍵こそ、事務所預かりか見つからない。歯がゆさに唸った時だった。まさぐる指の間からそれは飛んで足元へ落ちる。つまみ上げればそこそが鍵だ。ダッシュボードの裏にでも貼り付けてあったのか、そんな鍵にはゼロハンテープが貼り付いていた。

「オトリの爆弾で引き付けておいてホンモノを爆破。まごついてるあたしたちを尻目にこっちから脱出するためのスペアキー？　けどそれがアンタの命取りってことっ！」

全くの妄想だろうと結果オーライ。握り締めて鍵穴へ差す。ねじ切らんばかり捻ればピンゴだ。目覚めて運転席に明かりは灯り、重くモーター音が百々をシートごと揺さぶった。「迎えは空よっ。どうすんだか知らないけど、そのためにクレーンを動かす気でいたみたいっ！」

などと、どうにかこぎつけたとして操縦こそできるハズもない。

「ふうんだっ。とりゃあっ。いええいっ！」

つまり状況は体で覚えるの一択と極まり、逃がしてなるもので百々は踏み込み、引いて、倒して、手当たり次第だ、レバーにペダルを弄り倒した。

「うわっと、足のペダルで左右に回転するんだ」

しずしず動き出したクレーンを前にすれば、その心持ちは猛獣使いか。吹き込んだ無線の向こうでも百々の言葉にやり取りは速度を上げ、そこへ至って冷静に「ああ、なるほど」とこぼすストラヴィンスキーの声もまた重なる。

「百々さん、あったまいい。でもやってるコト、馬鹿ですよー」

確かに。

「誰です、誰が運転してるんですかっ？」

運転席のスピーカーか、ハートがもめていた作業員の声も漏れた。

「って、これでも飲み込み早い方ですっ！ どおりやあっ！」

百々は返すが冷静になれ。そういう問題ではないはずだ。

だが今やクレーンは百々に従い、延々左へ旋回している。ジブと呼ばれる腕部分を水平に振り下ろすと、巻き上げられていたワイヤーを伸ばして吊り金具、フックブロックを遙か下へと下ろしていた。

「じゃなくて免許ないでしょっ、免許！ 無茶苦茶だ！ 危ない、今すぐやめなさい！」

作業員の絶叫こそ響き渡り、そこでクレーンも旋回し切る。

「やめたらっ」

その運転席で睨むのは向かいに立つクレーンだ。

「逃げますうっ！」

同時に百々は踏み続けていたペダルから足を浮かせていた。

「きりんは、怒るとっ……」

吐いてためた気合いもろとももう一方を、抜けるほどに踏み込んでみせる。

「怖いんだからーっ！」

とたん逆回転するモーターが鋼鉄のキリンへ鞭を入れた。巨体ごと、もたげた長い首をひとたび振り戻す。

「食らえーっ！」

などと叫んだところで、その動きが群を抜いて鈍いことは言うまでもない。加えて振り戻されたジブ先端も、当然ながら一本足の前を普通に素通りしていった。

「あーっ、なんで当たらないのよっ！」

「当たり前です！　そこ、残念がるところではないです！」

つつこむ作業員は間違はなく真顔だ。

「鍵、抜いてください！　ワイヤーが不安定だ！」

確かに強風の中、繰り出された荒い運転に振り回されてフックブロックは振子と宙を泳いでいる。とは言えそれがどういふことなのか知識にも入っていないければ、フックブロックは百々の視界にも入っていない。

「うるっ、さーいっ！」

決行する再アタック。蹴散らしペダルを踏みかえていた。応ずる鋼鉄のキリンも唸り声を上げると嵐の中、反転の遠心力でもってしてフックブロックをさらに遠くへ放り投げる。優雅と軌跡が弧を描いていた。風にも乗ってさらに大きく膨らんだなら、果てに「ゴー」と音は夜空に響き渡る。向かいに立つ一本足だった。ついにフックブロックは叩きつける。

「……あ」

光景に作業員が声をもらしていた。

「あっ、たりーいっ！」

旋回してゆく運転席で百々はといえば跳ね踊る。

食らった男はきよとんとしたままだ。だが明るいだけに丸見えと、喜ぶ百々の姿にようやく状況を飲み込んだらしい。やがてららんと、見送るその目を輝かせていった。そいつは

面白い。言わんばかり発煙筒を打ち捨て、自らもクレーンの運転席へ身を潜り込ませる。なるほど二つのキーを持つことは、だから不自然となるはずだった。すぐにもそこに明かりは灯り、百々のクレーンより長いジブは倒されて、フックブロックが猛烈と下ろされてゆく。果てに助走をつけて右へ左へ旋回すると、やがてクレーンは百々と真逆の方向へ大きく旋回していった。

と、側面に貼られたそれは百々の目に飛び込んでくる。

「きりん2号」

「やっぱりねっ！」

吐いた百々の旋回とはいえ、振り戻すに最大の位置だ。だからしてジブ先端ではフックブロックもかつてないほど遠くへ飛び去っている。視界の端にとらえて百々は、これで終わりだとこの一撃に魂を乗せた。

「食らえ、ジラフうっ……」

唸り左右ペダルを踏みかえる。

「ア、ターあっくうっ！」

絶叫はロボットアニメの域か否か。

ならこのさいだ。

「俺が最後の同士だ！ 来るべき革命の日はちかーい！」

スピーカーから男の声も飛ぶ。

果てに唸り声を上げた鋼鉄のキリンとキリンの長い首は、嵐の空ですれ違った。そこから伸びたワイヤーもまた夜空にバツを描いて華麗に絡み合う。

「あー、あなた！ 危ない、あああつ……」

作業員がこの世の終わりと声を上ずらせていた。

二個のフックブロックは重ねた一点を中心にして、とたん互いを追いかけ始める。回転すれば縛り目は、上に下に伸びて二本のワイヤーを見る間に一本へより上げていった。

「捕まえたっ！」

光景に百々は目を見開く。

鈍く傾いた視界に、とたんその目を瞬かせた。

そう、走る縛り目が適当なところで止まってくれるはずもない。今や離れたジブとジブを引き寄せてまで、さらにタイトと縛り目を詰まらせていた。やがてわずかながらも、しかしながら着実に、かかる負荷が足元から不穏な音さえ響かせ始める。

「うそうそうそっ！ ちょっと待ったあっ！」

ままにじわじわ谷へ傾ぎ始めれば、もうじつとはしておれない。

「クレーンが倒れる！」

百々の前に十三階はのぞき、地上で作業員も悲鳴を上げた。

逃れて百々は運転席のドアへ手をかける。向かいで男も運転席を抜け出した。なら逃げず男はその屋根へよじ登る。及び腰となりながらもランヤードのフックを振り上げ伸びあがった。様子は何かを呼び寄せているようで、その通りとついに一機のヘリコプターは空の果てから現れる。

「きたあっ！」

言わずにおれない。百々も身を乗り出していた。いやそれともさらにクレーンが傾いただけか。とたん運転席にどうっと風は吹き込んで、共に潜り込んできた腕がそんな百々の体を引っ掴む。

「いつまでぼうっとしている気だ。早く出ろッ！」

「あれに乗っちゃうっ！」

ハートだ。訴えようが力まかせ引きずり出されていた。

「うだうだいうなッ。さっさと進めッ」

半ば連行されるかたちで跳ね上がるキャットウォークをとにかく後戻る。

背でジブ上空へ辿り着いたヘリは、激しいダウンウォッシュに身を縮めていた男めがけ、ひと思いと高度を下げていた。見逃すことなく男はその足、スキー板にそっくりなスキッドヘハーネスのフックを引っ掛ける。とたん高度を取りなおしたヘリの間合いは抜群だろう。もろとも舞い上がったその姿こそ、怪盗 SO WHAT となる。

「ああーっ！ わざとでしょおっ！」

百々は叫び、その視界を何かは大きく横切っていった。野太い音は嵐を裂き、かかった負荷に切れたワイヤーは弾けて宙を生き物のように泳ぐ。

勢いにも唐突さにも、クレーンから飛び降り百々は身を縮めていた。

切れて落ちたフックブロックが十三階を叩きつけたなら、ビッグアンプルは揺れてダメ押しと傾くクレーンが鼻先を突き合わせる。だがそれきりだ。切れたワイヤーはジブを叩いてぶら下がる。風に吹かれようとそれ以上、動くことはなくなっていた。

ものともせず上空では、何某の力を借りて男がヘリのハッチへ這い上がっている。乗せたヘリは黒煙吹き上がるショッピングモール上空を右旋回。ゆうと誰もの前から遠のいていった。

「役所仕事の限界だ。まったくどこから手をつければいい！」

屋上へ辿り着いた渡会がコートをなびかせ手を振り上げている。

「追いかけなきゃっ！ 早くっ！」

指差しハートへ百々も喚いた。

「焦るな。もう手は回してある」

落ち着き払って返されたそのとき、バリバリと彼方から新たなへりは飛来する。先行く一機を追い上げると乙部の機は、誰もの頭上を飛び越して行った。

何の変哲もない民間汎用機。そのベル社と思しき機影がきらびやかな街灯りに穴を空け飛んでいた。

「速度、最高二百強、いや、この気象条件じゃ前後がせいぜいか。連続飛行距離六百少々。このまま直進すれば……、十五分ほどで海へ出る、か。さて目の前のバーディをどうする？」
見下ろす位置で乙部は問いかける。

「言葉通りと行きたいところだが、貴重な情報源を公費でもってして抹消するわけにはいかない。なるべく穩便にこちらの意図へ沿ってもらったうえで、しかるべき責任を負ってもらう」

答えて返す声は言うまでもなく、ガラス張りの部屋、通称オペレーティングルーム、そ

のモニターを前にヘッドセットを装着した百合草のものだ。

都合よくも夜間勤務の交代者と重なった今回、事態に対応するオペレーターは通常の倍となっていた。だが飛び交うのは人手不足と、容疑者追跡の通信をはじめ消防に救急の無線。明日にも発表しなければならぬ本件のファンタジックなシナリオ作成に、上空確保をつとめる管制無線と散々な有様となっている。

「なら、六百キロ追い回して羽を休めたところでそっとすくい上げてやろうとでも？」

とぼける声を聞きながら百合草は、モニターの三分の二を埋めて展開された航空レーダーへ顔を上げていった。

「天然記念物なら、それもいい」

「が、貴重と言ってもそこまでじゃない、ってね」

落とした視線で傍らの丸テーブルに広げられた地図を眺め、再びモニターへそのアゴを持ち上げる。

「どこへ向かうのかは気になるところだが本末転倒だけは避けたい。そして彼らを押さえることができればその疑問に答えさせることも可能となる」

と、オペレーターの間から赤いスーツは持ち上がっていた。着込んだ彼女は同様にヘッドセットを装着すると、足早と百合草へ歩み寄ってくる。

「チーフ、許可が下りました。全面協力の同意も得ています」

ようやくか、と唸ったのは百合草だ。

「書類があるなら任せる。どうせ借りを作ったという記録だ」

「いえ、書面は全て後日でいいそうです。向こうもこれからそれどころではなくなるそうなので」

肩をすくめて返す彼女のそれが手腕なら、任せた百合草も呆れたように表情を緩めていた。引き締め今一度、マイクへ告げる。

「カゴの準備は整った。今から小鳥の捕獲に取り掛かる」

「了解」

さて、気象条件の悪い夜間飛行とくれば陽気に飛べる道理はなかったが、元来へりはVFR、有視界飛行がもっぱらだ。日が暮れたなら布団へもぐり、雨が降る日は表へ出ないが信条で、なおさら災害救助などともないと言言しない限り現状、そう特異な条件ではない。しかも相手のパイロットは強風の中、クレインから人間を回収した輩でもある。度胸もあればそれなりに経験を積んだ人物と考えられた。ゆえに闇にバーディゴ。何をどうする間もなく空間失調の果てにストール。というお粗末な結果こそ心配する必要もないと乙部は考える。

だからして墜落するか否かの瀬戸際まで追い詰めたとき、パイロットは必ず正しい判断を下すはずだと、自らカゴへ飛び込んでゆくはずだと、右手のレバーを引いて機の出力を上げていった。

右足ラダーの辺り。機影は相変わらず街灯りに穴を空け一直線と飛び続けている。用意されたカゴもその先で黒くくぼむと広大な土地の存在を知らしめていた。

視界の端にとらえつつ乙部は、浮き上がりつつあった機頭が完全に空を仰いだところで伝えて言う。

「開始する」

「了解しました」

耳にして、ベル機めがけ操縦桿を倒した。とたん夜景は壁と立ち上がり、機首が下がったのかテールが持ち上がったのか、それきり蓄えたエネルギーをぶつけてシコルスキー機は急降下の体勢を取る。

気づいたらしい。機体を傾けたベル機が眼下で流れるように左旋回。尻尾を巻くが相当と逃げ出していった。そのさい推進エネルギーは水平と垂直に二分されるのだから、伴い機体の高度は下がるが道理となる。だからこそ乙部はベル機から、ここぞで上昇の機会を奪いにかかった。なぞるような左旋回で追跡。上空制圧に集中する。

嫌って逃げ続けるベル機の向こうで街の灯りがグルリ、一回転していた。さらにもう一回転すれば元来へりはそれほど高い空を飛ばない乗り物であることを知らしめて、地上にくつきり道路は浮かび上がる。だからこそなお上空は譲らない。もつれ合うような螺旋降下は、ことさらその場所を安全地帯と認識させるためのチキンレースだ。

と、以心伝心。上昇のタイミングをうかがい続けていたベル機の旋廻が素直な降下の体勢へ移行した。そんなパイロットの目には、明かりに空いた黒い穴、そこに規則正しく並ぶ平たい屋根が工場の敷地か何かに見えたことだろう。

吸い寄せられるように降下してゆく。

果てに地上すれすれをホバリングしたなら、とどめと乙部はその上空をローパスした。押されたベル機はついにスキッドを地面へつける。

タッチアンドゴーで舞い上がる気配はない。代わりとばかりにローターの回転も止まらぬへりから三人、男は転がり出ていた。とたん照らして焼け付くような光は焚かれ、目指して敷地の果てからジープにハンヴィーは猛然と駆け込んで来る。三人を取り囲んでブレーキを踏んだなら、後部からこれでもかと自衛隊員は吐き出されていた。

果たして逃亡者の情報はどんな形で伝えられていたのか。かまえられた銃器は巷でめったにお目にかかれないものばかりだ。

促されて男らは啞然と手を挙げていた。いや、正確に伝えるならそれはパイロットだけ、というべきだろう。慣れないアクロバット飛行に残る二人は這いつくばると、それきり胃の中の物を吐き続けていた。

まだビッグアンプルでは消防と警察が全ての後始末に追われているらしい。何しろ爆発には十三名が巻き込まれたと聞かされている。死亡者が出なかったことだけが唯一、救いで、全ては保全作業が間に合わず起きた事故だと、倒れたクレーンも含め全ては想定外の天災が引き起こしたものと、明日、発表される予定らしかった。

そんな現場で検証はまだ始められていない。爆発の規模が規模なうえ真夜中のため、見つけ出すことは困難だと、いやあの玉に頼らずとも事実は明らかとなったも同然なのだから後回しにされているとのことだった。

引き起こした容疑者たちは、不時着した自衛隊基地にて拘束。猛烈な勢いで駆けつけたパトカーに乗せられ今では監視の元、運び込まれた病院で三半規管と過剰な二酸化炭素排出からの回復に努めているという。詳しい取調べは明日、というよりも眠っていないだけですでに零時を回ってしまった今日、日が昇ってからが予定されていた。

次いで礼状が出次第、俳優似の男の部屋を捜査することも知らされる。ただし部屋といっ

でも会社の寮で、入社して一ヵ月ほどのそこに期待するのはよした方がいいという話でもあった。

しかしながらそれら調査を待たずして明らかとなった事もいくつかある。俳優似の彼の名前がその一つだ。会社の名簿や所持品から判明した名前は春山武史。指紋も「20世紀CINEMA」のショーケースや、ビッグアンブル犯行予告へ添付されていたものと一致している。つまり決定的となったのは入国管理局のデータベースが改竄された、という事実で、しかしながら春山は送り付けられた犯行予告を知らず、迎えに来た二人もまたこう証言しているらしい。

身元確認もすんなり片付く民間エアポート会社のヘリパイロットは、同乗していたヤクザ者と金で結託しただけだと。一方、ヤクザ者の方はといえば、自分はハルヤマと名乗る男から金で依頼を受けただけなのだと。双方とも自分が何に加担しているのかを知らず、知ったのは逮捕されてからで、これら体調をおしてまでとれた自供もまた、加担していた事の大さに身の潔白を証明すべく懸命となった結果だということだった。

もちろん後で裏を取る必要があるが、そんな彼らの様子から証言の信憑性は高いというのが渡会の見立てだ。ゆえにもうひとつ明らかとなったことがあるとすれば、誰もヘリに行く先を知らなかった、という事実だろう。S O W H A T に続く重要な手掛かりのひ

とつはそこで、あっけなくも失われることとなっていた。

果ての午前五時。それら腑に落ちぬ状況がまとまりを見せ始めたのは、百合草の部屋で順にすまされてゆく報告の最後、レフがビッグアンブル屋上でのやり取りを明かしてからとなる。

「労働？」

応接セットへ腰掛けたハナが細い眉を縮めて振り返った。

「そうだ」

答えるレフは隣のソファ、その背もたれに尻を乗せている。向かいにはハートとストラヴィンスキーが立ち、その手が添えられたソファに百々は埋まっていた。墜落を目撃したと通報されていたらしい。乙部だけが少し離れた位置で壁に背をつけ、先ほどからずっと腕を組むと立っている。

「全ての娯楽に肅清を。与えられる娯楽は全て楽しむことを義務付けられた労働だと。そこに捕らわれた人民を解放することがテログループの目的であり革命だと奴は言った」

明かすレフの口調に曖昧なところはない。

「ならこれまで引き起こされてきた案件は全て、彼らにとっての革命だった、と？」

言って視線を投げた百合草は、いうまでもなく柿渋デスクの向こうに腰かけている。

「いや、革命はまだ始まっていない。そもそも俺たちがこれまで対処してきた案件は S O W H A T の活動じゃない。部外者の手によって引き起こされたものだ。奴の話が事実であれば S O W H A T は革命を実行に移すため各地に必要な頭数をそろえていた。そこへ志願した者が自身の意思が本物であることを示すため、言い換えるならテログループへの忠誠を誓う手段として、これまでの事件を起こしてきている。認められた者には迎えが来る。奴もそれを期待していた一人だ」

「だから要求や主張がはつきりしなかった、って？」
あごをつまんでハナはこぼした。

「……だとすればどうやら僕たちは」

聞いたストラヴィンスキーも興味深げと口を開く。

「S O W H A T の実際を取り違えていたようですね」

そんなストラヴィンスキーへ目玉を裏返していったのはハートだ。

「本物の活動は後ろに控えたテログループのオハコ、というわけか」

「相手にして、ずいぶんこちらの内情を知らせてやったんじゃないのか？」

乙部の声にレフが、見つめていた一点から視線を持ち上げていた。

「つまりハルヤマが知らずにいた犯行予告こそSO WHAT が出したもの、ということか」

デスクへ立てたヒジの上で、百合草が深く両手を組み合わせてゆく。ですね、と頭を揺らしストラヴィンスキーも返して言った。

「しかも迎えもナシというなら、あえて僕たちに捕まえさせるためだけのこれは騒ぎだった。そういうことになりますね」

「そんなの初めてよ？」

問いかけるハナはむしろ不可解さが増した様子である。

「……最後の同志」

もらったのは百々だった。

「革命の日は、近い」

そう、それはロボットアニメと見まごうキリン対決の最中、スピーカーから聞こえてきた男の声だ。一部始終には思い返したくない箇所も多々あったが、脳裏へ修羅場はありありと蘇ってくる。

「なんだ、それは？」

問いかけるレフが鋭い視線を向けていた。顔へと百々は目を持ち上げる。

「自分が最後の同志になるって、革命の日は近いって。クレーンでお兄さんが叫んでた」「そいつか！ オーディションは終わった。馬鹿はメッセージ代わりよこされただけか」「ついでに凝らした趣向でもってして、本番に備え僕たちの査定も行っていたかもしれないませんね」

百々の脳天へハートの声は降り、おっつけストラヴィンスキーも付け加えて言う。

「だとすれば次こそお待ちかねの革命、かな」

さらりと添える乙部の言葉こそ聞き逃せはしないだろう。全ての娯楽に肅清を。巡る言葉が誰もをしぼし黙らせる。

絶ち切って、百合草が柿渋デスクから立ち上がっていた。

「見解が正しければ想定される懸念のうち最も重大なものは、これまであいまいとされてきたプロパガンダが誰の目にも明らかな方法で公にされることだ。防ぐことができなければそれだけで事態は我々にとって取り返しのない『革命』になることが予想される」
指が神経質とデスクを弾く。

「必ず阻止する」

声は重く、しかしながらそれが大袈裟だとは思えなかった。与える者も与えられる者も、人はそれほどまで娯楽を必要とし、まみれている。たとえ開放されたとして行くあてもな

いほど誰もがそれを常用し続けていた。

そんな百合草の傍らでドアは浮き上がり、あの赤いスーツの女性は入ってくる。だからといって百合草が話を切る様子はなかった。

「たとえ春山が捨て駒だったとして、『20世紀CINEMA』で回収された爆発物の中から SO WHAT とのつながりを示す物証は回収されている。つまり春山は我々が初めて取り押さえたテログループの関係者だ。突破口はそこにある。入手の経路を辿れ。そこからテログループの実態を突き止めろ」

いや、必ず見つけ出せ、と目が一同を見回していた。

「そのためにも今後、警察側と協力。春山を中心に捜査を進める。各自、分担は現状のまま。文言にあった『近い』と言う時期がいつなのか現地点では不明だが、ゆえにこれは時間との勝負でもあると思ってかかれ」

声へ力はこめられ、デスクを弾いていた手はそこで空へ広げられていた。

「以上」

聞き入れ返すうなずきは、至って緩慢なものばかりだ。百合草もまた緊張を解くと再びデスクへ腰を下ろしてゆく。

「全員、ご苦労だった」

ならまったく、とため息を吐き出したのはハナだ。

「四時間後には春山の事情徴収に行かなきゃならないの。仮眠室、借りることはできるかしら？」

百合草へ書類を渡す赤いスーツの女性を呼び止めた。

「ええ、一番奥なら空いています」

「じゃ、お先に」

えいっ、とソファから立ち上がり、遠慮なく繰り出す背伸びでそれきり部屋を後にしてゆく。

「現場検証は鎮火後だ。俺は一度、帰って寝る！」

何に腹を立てているのか、唸ってハートもきびすを返していた。

「礼状ももうしばらくかかりますしね。ぼくもフロくらい入っておきます。お疲れ様でした」

背へストラヴィンスキーが続く。おかげでドア前は混み合うと、立ち尽くしていた乙部も自然、外へ押し出される格好となっていた。

「シコルスキーをチェックしておくか」

「ええっ、まだ仕事するんですか？」

「どうせヘリの中で寝るんだろうが。俺には考えられん」

「今すぐ飛べと言うのが、このやり方じゃないか」

「いやあ、オツさん、おつかれさん……って、せっかくの冗談聞いてくださいよ。わかってないなあ。オツさん、オツさんてば！」

などとハートは最後まで怒り、ストラヴィンスキーのオヤジギャグを面白おかしく聞きながら百々もソファから腰を上げてゆく。

「わたしも失礼します。お疲れ様でした」

百合草へ頭を下げた。だが百合草はチラリ、書類から視線を投げただけだ。ただこう百々へと告げる。

「明日、ここへ八時半。指示は彼女が与える」

「え。今日、遅番なんですけれども」

早々にも打ち切りが決まった映画「バッファロー」の後ガマの後ガマ、その試写が控えていた。

「だからして明日に伸ばした」

なるほど。シフトは支配人、水谷からダダ漏れである。

「わ、わかりました」

仕方なくトートバックを掛けなおす。改め繰り出した一礼で、ドアへ身をひるがえした。見届けたレフも最後に尻を上げている。百合草の声はそんなレフへも狙いすましたように投げられていた。

「送ってやれ」

否や振り返ったレフが「なぜ俺が」と言いかけたことは、背にした百々にも十分、伝わっている。だからこそ、そんなレフをとらえた百合草の目は百々が食らったそれとは比べ物にならないほどと鋭かった。果てにシン、と冷えた声は部屋に響く。

「命令だ」

薄ら明るい表は、すっかり台風一過の様を呈している。人気のない路面には新聞紙から看板までが散乱し、断るにも断れない状況を経て百々は、それら荒涼とした風景の中をワゴンの助手席におさまり帰宅の途についていた。

レフは全く喋らない。気難しげな表情でただハンドルを握り続けていた。あまり車内の雰囲気はよろしくない。いや、元々この車に乗って良かったことが一度でもあったろうか。百々は懸命に思い返してみる。だが明るくなりつつある空の色と裏腹の眠気に疲れが頭の芯を掴んで離さなかったなら、考えは一向にまとまらず、だからといって眠る図太さも持

ち合わせていないなら三分だ。居心地の悪さに辟易して百々は三分で自ら口を開いていた。

「気になってること、聞いていい？」

「なんだ」

せめて二言以上で返してほしいが、現状、多くは望めなそうもない。諦め百々はともかく問う。

「犯行予告、アレの出どころって誰も調べないの？」

と、ワゴンは赤信号にブレーキを踏んだ。当然ながら横断歩道を渡る人の姿はなく、止まっていることが間抜けのような、それは光景だ。しかし臆せずレフは現状に輪をかけて、クソ真面目と説明をし始める。

「送られてくる犯行予告に声明文は物理的なもの、電子的なもの二パターンがある。物理的なものの送りは主不明。消印もなければ指紋も出た試しがない。筆跡もひとつと同じものは上がらず。インクや用紙の特定はなされたところで量産品ばかりだ。電子的なものに至っては数の多さと複雑な経路をたどり送り付けられているせいで、発信元を辿ることは実質、不可能。そもそも数が多すぎる。全てをどこまで真に受けていいのかさえ判断しきれない」

続きのようなタイミングだ。そこでシフトレバーは入れ替えられていた。信号が青に変

わっている。ワゴンはゆるり、動き出していた。

「うーん、世界中の同志って人たちが送りつけてるのかもね」

思いつく得策などあるはずもない。社交辞令だ。百々はただ返していた。案の定、そこで会話は切れる。エンジン音だけが車内を満たした。

「だらうな」

ずいぶんと間をおいて言うレフに、何だその間合い、と思う。チラリ、百々はそんなレフを盗み見た。気づいたらしい。正面を見据えたままでレフは大きく息を吐き出す。

「あの似顔絵は間違っていなかった。特徴をよく捉えただけにディフォルメが過ぎただけだ。正面から見て思った。信用していなかったことは詫びる」

「え、そうなの？　というか、そういうことは最後まで言わなくていい。ショック倍増した」唐突な謝罪に、当の百々こそ目を白黒させる。おかげで疲れも倍増していた。ぐったりシートへ沈み込んでゆく。

「それよりさあ」

唇を尖らせた。

「命令だ……」

真似る百合草の声。

「あそこで勝手な行動するから、こうなるんだよ」

「逃がすつもりはない」

「でもあれは……」

言いかけたところで駅の屋根はのぞいていた。

「あ、ここがいい。下ろしてっ!」

始発ならもう十分に動き出している時間である。

「駅でいいのか?」

慌ててレフがウインカーを跳ね上げていた。その目を左右へと振る。

「うちに横付けされちゃ困るよ。親に就職先でテロリストと戦ってます、って言える?

台風で電車が止まったから20世紀の事務所泊まったってことにする。それにその方がそっちだってつまらない任務から早く開放されるでしょ」

いや、これはもう雑用の域だ。

あいだにもワゴンは駅前のロータリーへ潜り込んでゆく。客待ちのタクシーに紛れ、緩やかとブレーキを踏んでみせた。

「明日、八時半。独りで地下へ降りられるな」

などといった幾つだと思われるのか。降りた百々の背へ声はかけられる。

「当然。そっちこそ、ちゃんとお父さんの言いつけ守ってなさいよね」

おかげで百々も車内へ頭を突っ込み返していた。

「夜じゃないぞ。朝だぞ、朝」

これ見よがしと連呼されて、たまらず唸り声を上げる。

「わかってるつてば。ああ、もうっ！ 帰って速攻、寝るっ！」

勢いよくドアを閉めた。

ほどなく動き出したワゴンの窓から、わずか笑ったレフの横顔がのぞいたような気がしたのは気のせい。つられて百々も少しばかり口元を緩ませる。

どうやらホームへ電車は到着していたようだ。見送れば、そんな百々の周囲をスーツに身を包んだ男女はどうつと取り囲んでいた。

この中に、と百々は思い巡らせる。この中に今夜の一杯や彼とのデートを楽しみにオフィスへ向かう人はいるかもしれない。新作映画に最員のチームの試合を楽しみとしている人がいるかもしれない。欠かせない全ては明日のための燃料で、そのどこに破壊される理由があるのか、全ては不可解の向こうに隠れて触れられない。

ままだ百々は柔らかいベッドを求め、ホームへ向かい身をひるがえす。興ずることができるとき、まだ世界は平穏だと、そしてこれからもその平和は続くのだと、信じて一人、改

札をくぐりぬけて行った。